

科目名		授業形態	担当教員名	
音声障害		講義	四宮 弘隆	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	1 年次	後期
授業の目的・概要				
人間が音声を生成するには、呼吸や声帯、共鳴の要素がうまく連動することが必要となる。そのどれかが欠けると正常な音声を生成できなくなり、音声障害を生じる。音声障害の病態を理解するために、喉頭の解剖や呼吸の生理の知識は不可欠である。また音声障害の原因を突き止めるための検査方法を熟知し、障害の原因となる疾患を見つけ出すことで、初めて音声障害の治療ができる。言語聴覚士の本分ともいえる音声治療につなげるための基礎知識を得ることが授業の目的である。				
授業の到達目標				
呼吸の生理、喉頭の解剖生理を図に示しながら説明できる 音声の検査の方法を知り、評価ができる 音声障害をきたす疾患を上げ、その原因や治療法につき説明できる 音声障害の患者の問診や検査を行い、病態を考え、治療法を考察できる				
授業計画				
回	内容			
1	導入 音声障害とは何か 音声領域でのSTの役割は			
2	発声とは 呼吸（呼吸の生理 吸気、呼気で働く筋肉 肺気量分画）			
3	喉頭の解剖 （喉頭の軟骨 内喉頭筋の働き 声帯の層構造 声帯振動） ミニテスト			
4	喉頭の解剖 気管カニューレ（カニューレの選択 挿入方法）			
5	音声の検査 （喉頭内視鏡 ストロボスコピー GRBAS 空気力学的）ミニテスト			
6	音声の検査 （音響分析 MDVP 筋電図 VHI）			
7	喉頭の良性疾患 ミニテスト			
8	その他の疾患（痙攣性発声障害 機能性発声障害 声帯麻痺）			
9	喉頭の悪性疾患 代用音声（電気喉頭 シェント発声 食道発声） ミニテスト			
10	喉頭の疾患のまとめ			
11	小テスト 音声治療			
12	音声治療（声の衛生指導 音声治療 喉頭マッサージ 緩める方法 強める方法）			
13	音声治療 症例検討 ミニテスト			
14	症例検討 2			
15	症例検討 3			
成績の評価法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	60%			
レポート				
小テスト	40%	（ミニテスト5回 小テスト1回） 変更の可能性あり		
平常点				
その他				
自由記載	各時間の初めに前回の復習のミニテストを行います			
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
標準言語聴覚障害学 発声発語障害学 第3版		藤田郁代監修	医学書院	
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
病気がみえるvol 13 耳鼻咽喉科			メディックメディア	
新編 声の検査法		日本音声言語医学会 編	医歯薬出版株式会社	
自由記載				
備考				